

歩み寄る投資運用と社^{ファイ}

高橋陽子、岡本和久、

年金は先細り、政府・地方公共団体の財政は窮乏状態。

今後、社会保障や公的サービスの質は格段に低下していくことが予想される。

この社会の荒廃をくい止め、生活の質を向上させるにはどうしたら良いのか？

そこでは投資とフィランソロピーの歩み寄りが、大きな鍵になってくるに違いない。

「投資」と「フィランソロピー」が 日本社会再生の鍵となる

澤上：今回は投資とフィランソロピー（社会貢献）をテーマに話し合おうということなのですが、でもこの二つ、現在の日本では一見、とてもかけ離れて見えますよね。

伊藤：たしかに投資に関しては依然として「世の中ゼニや」みたいなガリガリのエゴイステイックなイメージがあるし（笑）、片やフィランソロピーというと、「よほど奇特で殊勝な人たちの世界だろう」といった風潮がありますから。

澤上：ところが投資と社会貢献は、これからの成熟経済の中ではベクトルの方向が、とても似てくるのではないかと思うんです。

伊藤：何しろ国や地方公共団体の財政がこれだけ悪化していますから、今後は医療や教育、治安といった公共サービスの質がどんどん低下していくことが予想されます。それに年金も、もう従来の水準では受け取れそうにありません。

世の中の不安は高まっていますが、かといって今までのように「年金がもらえない」とか、「政府が景気対策を打ってくれない」といったお上に頼る姿勢を続けていても仕方ありません。

それよりも私たちが考えたいのは、発想を転換して、民間のレベルで従来の公的サービスに代わるような社会保障のシステムを、つくりあげていってはどうかということです。

そしてそこで必要になってくるのが、投資とフィランソロピーということですね。

澤上：一説には現在、日本では公的部門に関係したり、補助金を受けているなど、何らかの形で「税金で食べている」人たちが、全就労人口の4割を越すそうです。

従来、それだけ強力に、政府は国民のお金を税金とか預貯金の形で吸いあげ、民間に再配分するというをやってきたわけですが、でも現在、そのシステムが制度疲労を起こして機能しなくなっています。

なぜかということ、そこにはもたれ合いだとか、利権や寄生、コスト意識のなさなど、ムダなものがいっぱい含まれているからです。セルフコントロール

ランソロピー 会貢献活動

伊藤宏一、澤上篤人



が効かなくなって、システムが野放図に肥大してしまっているわけです。

国債を大量発行して予算を調達し、度重ねて景気対策が打たれるけれど、さっぱり効果が現れないのはそのためなんですね。

ではどうしたらいいのかというと、これはわれわれの挑戦ですが、肥大化した公的部門に代わって、「投資」という効率性を追求するシステムを、福祉や教育など社会保障的な分野に導入してはどうかということです。ここに投資とフィランソロピーとの接点が見えるわけです。

ということで、今日は日本フィランソロピー協会理事の高橋陽子さんと、投資顧問会社を営んでいる岡本和久さんと一緒に、このテーマについて掘り下げて考えてみたいと思います。

**ちょっとした労力や工夫を出し合うことで
社会はもっと住みやすくなる**

澤上：ではここでまず、高橋さんに現在のご活動、

そして日本でのフィランソロピーの現状についてお話ししていただけたならと思います。

高橋：まず私たちの活動の根本にある基本的な考え方ですが、やはり先ほどもおっしゃられましたように、今までの行政依存、企業依存というシステムから抜け出して、これからはみんな一人ひとりが、自分の行動と責任でより住みやすい社会を創っていきましょうということです。私どもは、そのきっかけづくり、しかけづくりをしています。

たとえば、障害者でも地域で暮らすことができる人が、施設に入れられているといった場合があります。本人も幸せではないし、コストも莫大なものがかかります。

かわいそうだからではなく、同じ人間として地域で共に暮らし、できれば仕事もしてもらうことが、地域そのものを元気にやさしくすることになります。そのために、具体的にはITを活用した事業をしています。

ひとつは、ボランティアによる目の不自由な方へのインターネットを通じた音読サービスです。人には聞きにくい生活情報や、プライバシーに属するも



岡本和久

日興証券株式会社を経て現在、パークレイズ・グローバル・インベスターズ株式会社社長。
ラオスのビエンチャン市郊外、タオタンへの小学校建設のために資金提供をするなどの社会貢献活動も行っている。

のを中心に読んでいます。

もうひとつは、知的障害者施設で作っている製品で市場に出せるほどレベルの高い物の、オンラインショップを運営しています。

また、知的障害者の方々の経済的自立を支援するための、仕組みづくりを実験的にしています。自閉症の人はこだわりが強いので、うどんやそば職人としては、非常に力を発揮します。また、ダウン症の人は人懐っこい人が多いので、接客業では最高の笑顔でもてなしてくれます。

従来の日本は縦割りの「^{なこっほ}蛸壺社会」ですから、知らない故の差別意識、閉塞感があります。これを取り払って、同じ仲間として一人ひとりが自立しておかつ支え合えば、もっと有効にそれぞれの資源を出し合うことができ、結果的に社会に開放感がみなぎって元気になるように思います。

そのために、まず出会いをつくり、体験してみるというきっかけづくりをしています。企業・行政・学校福祉の人たちに同じ土俵で関わってもらうことで、同じ人間なんだ、あるいはみんな違って当たり前なんだと感じてもらえれば、しめたものです。

こうしたことを企業の社会貢献として、また社員をはじめ、個人の社会参加活動として、関わるためのしかけづくりを積極的にしています。実際、ここ数年で、企業も個人も変わってきましたね。これをもっと育てる、社会システムをつくることが求められています。

伊藤：ボランティアやフィランソロピーは、もはや特別なことではなく、実はいろいろな社会の問題を解決していく上で必要な、ある意味とても「実用的」

で日常生活に密着したシステムなんですね。

高橋：ただし残念なのは、いまだに日本ではフィランソロピーを特殊視する風潮が強いことです。

フィランソロピーをポピュラーなものにしようということで、「まちかどのフィランソロピスト賞」という賞を設けて、市井の中で社会貢献されている方を顕彰しているんですが、結構辞退されたり、周りには黙ってほしいとおっしゃる方が多いんです。

「世間に知れると、活動がやりにくくなってしまいうからそっとしておいてください。家族にも教えていないくらいなんですから」というんですね。

やはり日本では慈善事業をやっているというのと、「金持ちの道楽だろう」といった妬みの目や、あるいは売名行為や税金逃れ、自己顕示と結びつけて見られる傾向があるということなんです。

私どもは公益団体ですが、まず役所から、「そういった顕彰は公益活動の一環とは認められない」と言われたりします。その理由は「個人を顕彰してるから」だということですね。

伊藤：驚くべきロジックですね。そもそもこうした活動は、個人の自発性こそが土台になるというのに。

さりげない、自然体の社会貢献

伊藤：ところで岡本さんは海外でも長く生活をされていますが、この辺のフィランソロピーに関する事情は向こうではどうなのでしょう？

岡本：私は北米での生活が主なんですが、たとえばアメリカという国は非常に個人主義的な風潮が強い反面、フィランソロピーがとても日常的な形で社会に浸透しているのも事実ですね。この辺はヨーロッパもおおむね共通していると思います。

現在、英国資本で米国に本拠のある会社に勤めていますが、別に対外的に宣伝などはしないけれど、それなりに工夫して社会貢献をやっています。

たとえば、クリスマスになると会社でクリスマスツリーが設置されて、社員がそれぞれプレゼントを持ち寄ってぶら下げていくわけです。そしてその集まったプレゼントをどうするかというと、いろいろな事情で親がいない子どもさんに贈るんですね。

それから年末にクリスマスカードを送るのをやめて、代わりにeメールでクリスマスの挨拶を送るわ

けです。それで浮いた切手代とクリスマスカード代を、慈善事業に寄付したりしています。一見、些細な金額ですが、これをイギリスのオフィスでもアメリカのオフィスでもやるという具合に全社的に行うので、結構な額になるんです。

伊藤：ちょっとした努力が必要ですが、これが社会全体で行われると、かなりの大きな力になりますね。

岡本：そうなんです。ここで大切なのは、特別に改まったりとか通り一遍というのではなくて、それぞれ創意工夫をして、過大な負担にならない範囲であっさりとやってしまうことです。

私事で恐縮ですが、ラオスの小学校建設の資金を提供した際のお金は、実は父親の葬儀の際に集まった香典なんです。参列者の方にことさら立派なお返しをするよりも、こうした使い方をした方が、より大きな目で見ると世の中のために役立つと思ったので寄付をすることにしたわけです。

これを行ってわかったのですが、小学校ができてからずっと、「きっとあの学校から、ラオスのため、世界の平和のために役立つすばらしい人々が育つだろう」という楽しい夢がわいてくるんです。

言ってみれば、寄付という投資を行うことで、夢という配当を受け取ることができるわけです。これが、どれだけ人生を豊かにするかわかりません。しかもそれは、永久に続くわけです。

この経験を通して、「寄付」は夢という配当を払ってくれる「投資」なんだということを実感しました。

そして、こういうことをしている人は私の友人や知人にもたくさんいて、向こうでは別に特別なことではないんです。

日本では、たとえば森進一さんや杉良太郎さんのような方が、かなりのお金をフィランソロピー事業に寄付しています。陰徳という文化もありますが、できるだけ人目につかないように、ひっそり黙々となさっているようなところがあります。でもアメリカでは、俳優のカーク・ダグラスさんがホームレスの自立支援施設をつくって自分の名前を冠していても、だれも取り立てて騒いだりはしないんです。

日本人の意識の底流に流れる フィランソロピー精神

伊藤：こうした欧米と日本とのフィランソロピーに

社団法人日本フィランソロピー協会理事長。中学校、高校でのカウンセラーを経て1991年、同団体の前身である国民政治研究会に入る。2001年より現職。従来の行政依存・企業依存のシステムから脱し、社会のさまざまな問題を市民自らの手で解決することを目的に、セミナーや出版活動などを展開している。また「まちかどのフィランソロピスト賞」「企業フィランソロピー大賞」などを創設、顕彰活動も行っている。



高橋陽子

対する姿勢の差なんです。やはり、歴史的な流れが随分違うことも影響しているんでしょうね。

まず日本では明治維新以降、欧米にキャッチアップするために、とにかく強力な中央集権体制を敷いて国家中心でやってきました。そのため公共サービスは国がやるものと決まっています。パブリックな意識で自分たちが手作りで構築していくという発想が育ちませんでした。

それから市民社会というものはあまり育たなかったけれど、一昔前までは家族や親戚、あるいは地縁の絆が強くて、お互いに支え合いそれが相互扶助になっていたことも大きかったでしょう。

ところが急速に核家族化して血縁のつながりは薄くなってきたし、都市化も進行して地縁関係も疎遠になってきたので、気がついてみたら自分の周囲にセーフティーネットが何もなくなっていたという状況に直面しています。

澤上：それが効率化の負の遺産ですね。

昔は経済的には貧しかったけれど、「お互いさまです」とか「お世話様です」といった格好で、何か安心感がありました。

ところが効率化に走れば走るほど、頼れるものはお金しかない、倒れても自分一人しかいない、という状況になっていくわけです。

高橋：自然体のフィランソロピーをどう日本社会の中に根づかせるかということが現在の大きなテーマですが、そこでひとつの大きな鍵になってくるのは、その「お互いさまです」とか「お世話様です」といった、日本人の意識の底流に流れるパブリックな意識を呼び覚ますことではないかと思うんです。

歴史を振り返ってみると、結構いろいろと日本にはパブリックな意識はあるんですね。

たとえば近江商人（※注1）たちの間で伝えられてきた家訓に、「三方良し」というのがあります。

これは「売り手良し」「買い手良し」に加え、「世間良し」というのがあって、この三者にとって利益になる商売を行わなければならないということです。

そしてこの「世間良し」という発想は、まさにフィランソロピー的なビジネスの精神にほかならないわけです。

伊藤：たしかに、古くは奈良時代^{ぎょうき}に行基^{きんぎ}というお坊さんが民衆に働きかけて灌漑や架橋の工事を行ったり、布施屋^{ふせや}という旅人の宿泊所を設ける社会事業を行っています。

それからほかにも、勧進聖^{かんじんじりちようげん}重源^{じゆうげん}といった僧侶たちが、民間からお布施を集めて病人や窮民を救済する施設をつくったりという例も多くあります。

江戸時代に入ると、「結」（※注2）や「講」（※注3）といった相互扶助組織も盛んになります。

それにそもそも、日本の近代資本主義の礎を築いた渋澤栄一のような人が、きわめてパブリックな意識の高い企業家でした。彼はあえて財閥をつくらずに、独占資本家と戦いながら社会的な利益を優先させてたくさんの企業や教育機関、医療機関を設立しています。

民間のレベルで支え合おうという精神は、日本人の中に脈々と流れているんですね。

高橋：そもそも日本では「働く」ということに、「稼ぎ」と「勤め」という二つの意味・要素がありますね。「稼ぎ」は自分の生活のため、そして「勤め」は公のためという仕事の要素です。

仕事に対してこういう言葉の使い方をする文化というのは、なかなかユニークではないかと思います。

ですからこの辺から、日本的な形でのビジネスとフィランソロピーの歩み寄りが起こる可能性は十分にあると思うんです。

伊藤：なるほど、その「三方良し」とか「稼ぎ」と



伊藤宏一編集主幹

「勤め」という考え方は、現在盛んになっているSRI（Socially Responsible Investment：社会責任投資）やCSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）とも通じる考え方ですね。

今までの社会貢献というのは、まずお金を稼いで、その中から寄付をするという発想でした。この中には「ビジネスを行う以上、公害を出したりあざといことをやってしまうのはある程度仕方がない、寄付はその罪滅ぼし」といったニュアンスも含まれていたのではないかと思います。

ところがここに来て、地球環境や人権問題がクローズアップされたこともあり、「経済活動と社会への貢献は一体でなければならない」と概念が進化してきています。

ではこのビジネスや投資と社会への貢献を一致させていくためにはどうしたらいいかというと、まず重要なのはお金についてもっと深く考えたり、そのための教育を行うことだと思うんですね。

アメリカのファイナンシャル・プランナーが作成する個人のキャッシュフロー表やバランスシートを見る機会があるんですが、支出の部のところに最初からチャリティ（寄付）の項目が設けられていたりします。普通に生活しながら富を分かち合うという考え方が、大分浸透しているんですね。

日本の場合は、「ファイナンシャル・プランニング」の概念が導入されてから15～16年くらい経つんですが、不況ということもあり、まだ個人レベルのことに必死で、そこまで発想が回らないのが現状です。

結局、お金というのは幸福に生活していくためのツールなのだから、抱え込んだり、効率の悪い使い方をして仕方がありません。金庫の中に眠らせていたり、あるいは株価の値動きばかり見て、「上がった、下がった」と短期売買ばかりやっても、経

（※注1）近江商人：近江の国に生まれ育ちながらも、他国に出て店を開いたり行商することを基本とした商人。全国各地に出店・枝店と呼ばれる支店を積極的に開設し、さらには江戸・大阪・京都の三都に進出するほどの豪商となった。

（※注2）結：田植・稲刈り・屋根替えなど、一度に多くの労働力を要する仕事をする際、互いに手を貸し合う相互扶助的組織。

（※注3）講：一般の人々がわずかな資金を持ち寄って仲間の一人に貸し与え、事業資金とした相互扶助的な組織。江戸時代後期の篤農家・二宮尊徳の創設した「五常講」では金の貸し借りに際し、人間として守るべき道、「信・仁・義・礼・智」を理念として置くこととされた。

済の質はよくならないんですね。

ですから社会全体を考えて、できるだけ意味のある使い方をすることが、結局、自分の幸福の最大化につながるという理解を深める必要があると思います。

岡本：たしか経営学で有名なピーター・ドラッカーだったと思いますが、「人生の中で最終的な投資は寄付である」というようなことを言っています。

投資とは利益の追求ですが、それでも人生には限りがあるし、稼いだお金を墓場まで持っていくことはできません。相続税で政府に取られ、自分の意図

しないところに使われてしまうのはつまらないし、自分のお金を最も自分で納得できるように使う手段は、やはり寄付だというんですね。

それからジョン・テンプレトンという有名な投資家も「富によって人間が幸せになるためには、富を蓄積することに精神的な満足をもたらすような目的がなければいけない」という主旨のことを言っています。彼は「テンプレトン賞」という賞を設けて、あらゆる宗教の発展に貢献した人を支援しています。

この賞は賞金の高額なことでも有名で、ノーベル賞を受ける前のマザー・テレサや、それから文学者のソルジェニーツィンのような人が受賞しています。

結局、寄付や社会貢献というのは、究極的なお金の使い方でもあるんですね。

澤上：これは本誌のテーマでもありますが、自分で考えて、自分で良かれと思うことにお金を使うには、やはり「個」が自立しているのが重要ですね。

まず前提として、「個」がなければ何も考えられないから、結局、「国かだれかがやってくれるだろう」ということで、もたれ合いになってしまいます。

伊藤：これからは「もたれ合い」ではなく、自立した個による「支え合い」で社会の問題を解決していくということですね。

高橋：大々的なスローガンがあったりというのではなくても、「何か面白そうですね、一緒に仲間に入りたいな」といった関係で個人が集まり、社会が作られていくと。そんな世の中って、とても楽しいと思うんですね。



澤上篤人編集委員



🎀 ビデオ貸し出しのお知らせ

日本フィランソロピー協会が制作した映画、「まひるのほし」（佐藤真監督 1998年）のビデオを貸し出します。

この映画は絵画や陶芸などのアートに携わる、知的障害者と呼ばれる人たちのドキュメンタリー。世の中の既成の概念から飛び出して生きる主人公たちの姿が、生きる元気を与えてくれることでしょう。

くわしい作品の内容は協会のホームページ (<http://www.philanthropy.or.jp/publish/film/film.html>) でご覧になれます。

お申込は本誌編集部（住所、連絡先は巻末記載）、担当・伊藤（周）までお寄せ下さい。

